



Title	圭頭大刀の生産と流通（補遺）
Author(s)	豊島, 直博
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 643-652
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105078
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

圭頭大刀の生産と流通（補遺）

豊島 直博

はじめに

圭頭大刀は装飾付大刀の一種で、把頭が古代中国の玉器「圭」に似ていることから、そう呼ばれている。筆者は前稿で圭頭大刀を再検討し、3類8型式に分類した。また、それらを3段階に編年し、存続年代を6世紀第Ⅳ四半期から7世紀第Ⅱ四半期に位置づけた。さらに、百済に系譜をもつこと、法隆寺に伝世する七星剣との類似から、生産主体を上宮王家と推定した（豊島 2023）。

その後、瀧瀬芳之氏から圭頭大刀の類例についてご教示を受け、追加の資料調査を行った。前稿のおもな論旨に変更はないが、分布図に補足の必要が生じた。そこで、本稿では追加調査の成果を報告するとともに、新たな分布図を提示し、派生する問題を論じたい。

1. 圭頭大刀の分類と編年

分類 筆者は菊地芳朗の分類を参考に（菊地 2010）、圭頭大刀を把頭頂部の形態によってA類（頂部がわずかに突出するもの）、B類（頂部の中央が大きく突出するもの）、C類（頂部の突出が偏り、「へ」字状を呈するもの）に大別した。また、各類を袋式（鑄造や打ち延ばしで袋状に作るもの）、覆輪式（覆輪状を呈するもの）、二枚合わせ式（匙状の部品を中央で蟬付けするもの）に細分した。また、A類袋式は銀製のⅠ式と、銅製または金銅製で花形飾をもつものが多いⅡ式に細分した。図1は分類模式図である。

さらに、把頭の観察視点として、大きさと側面の平坦面の有無がある。大きさは、高さ5.0×幅4.0 cm未満を小型、高さ6.5×幅5.0 cm以上を大型、その間を中型に分類する。側面の平坦面は①両側面にもつもの、②刃部側のみにもつもの、③平坦面をもたないものがあり、資料の検討の際に適宜記述する。

編年 A類、B類、C類は型式学的に連続し、型式の相違は年代差を反映する。筆者は各型式に装着される環付足金具の年代観（豊島 2013）、双龍環頭大刀や頭椎大刀に装着される把間金具との共通性などから、A類を6世紀第Ⅳ四半期、B類を7世紀第Ⅰ四半期、C類を7世紀第Ⅱ四半期に位置づけた。以上が前稿で論じた圭頭大刀の分類と編年である。



図1 把頭の分類模式図

2. 資料の検討

(1) B類覆輪式の諸例 (図2)

神奈川県間際根横穴墓例 (1・2、浜田・長谷川 1995) 把頭金具 (1) の大きさは筆者分類の中型に当たる。覆輪は金銅製で、両側面に平坦面をもつ。内区は銀板で、片面のみ遺存する。4ヶ所に釘穴が認められ、火炎文板を装着していたと考えられる。覆輪下端に金銅製責金具が1点残存し、覆輪の端部がはみ出すことから、本来は2連であったと考えられる。

把頭から把間にかけての木芯部 (2) が遺存する。片面に金銅製鳩目金具1点が残存し、長さ2cm以内の短脚式である (豊島 2019)。両面に火炎文板を取り付けた釘穴をもつが、把頭基部に、それらとは別に直径3mmの釘が2点残存し、内区の銀板を固定したものと考えられる。把間には横方向の圧痕と銅鏽が残るが、切羽縁金具の痕跡か、把間に巻いた金銅線の痕跡か、判然としない。

千葉県物井1号墳例 (3、物井古墳発掘調査会編 1982) 筆者分類の中型に当たる。覆輪は金銅製で、刃部側の側面に面取りをもつ。背側の側面は欠損し、平坦面の有無は不明である。木芯部分には短脚式の鳩目金具1点と黒漆が一部残存する。

把頭以外に金銅製釦が付いた刀身と茎の破片、銅製無窓板鏢、金銅製鏢縁金具、金銅製把間金具がある。把間金具については後述する。

宮崎県千畑7号墓例 (4、蓑方 1993) 筆者分類の中型に当たる。覆輪は金銅製で、両側面

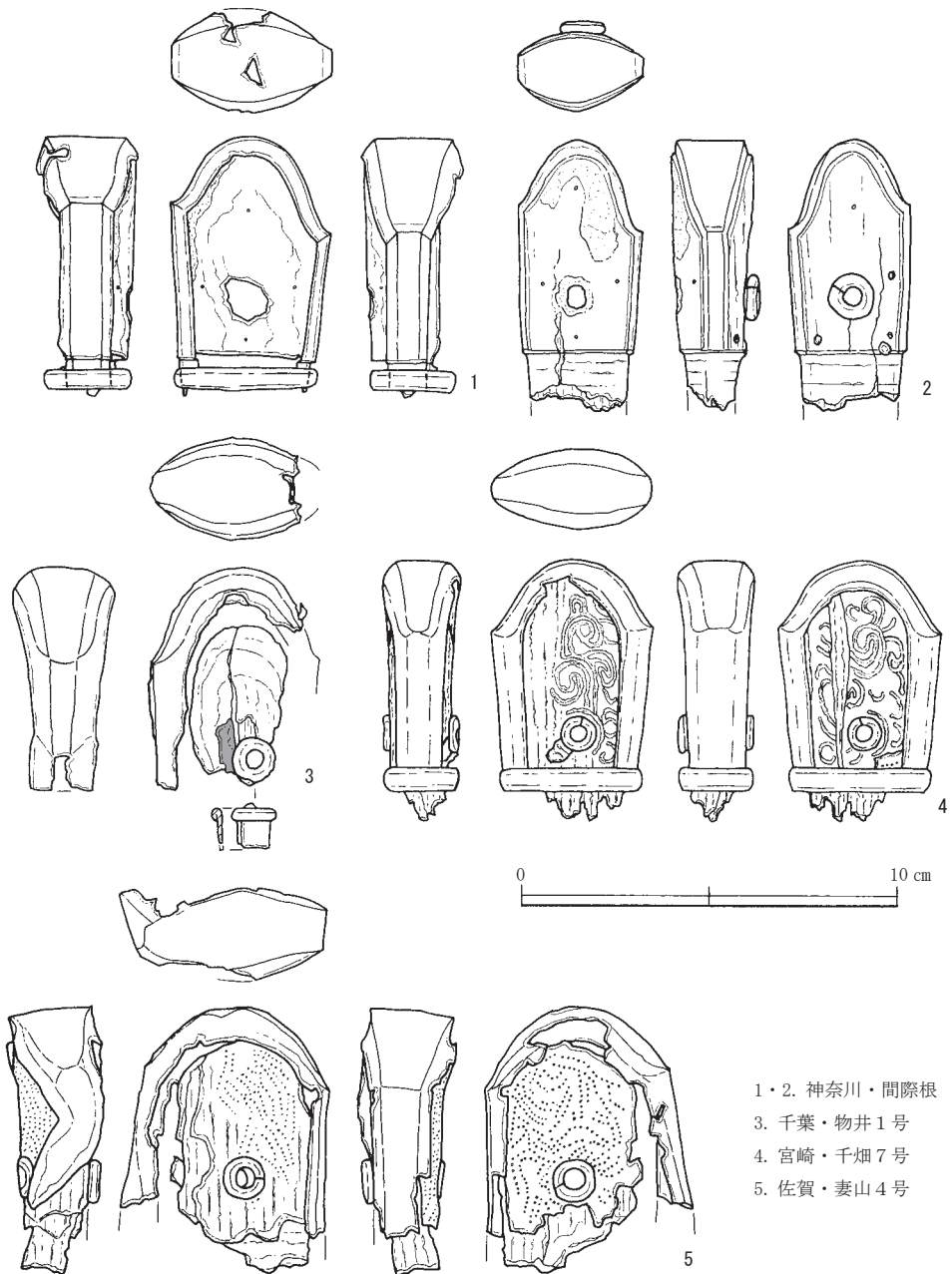
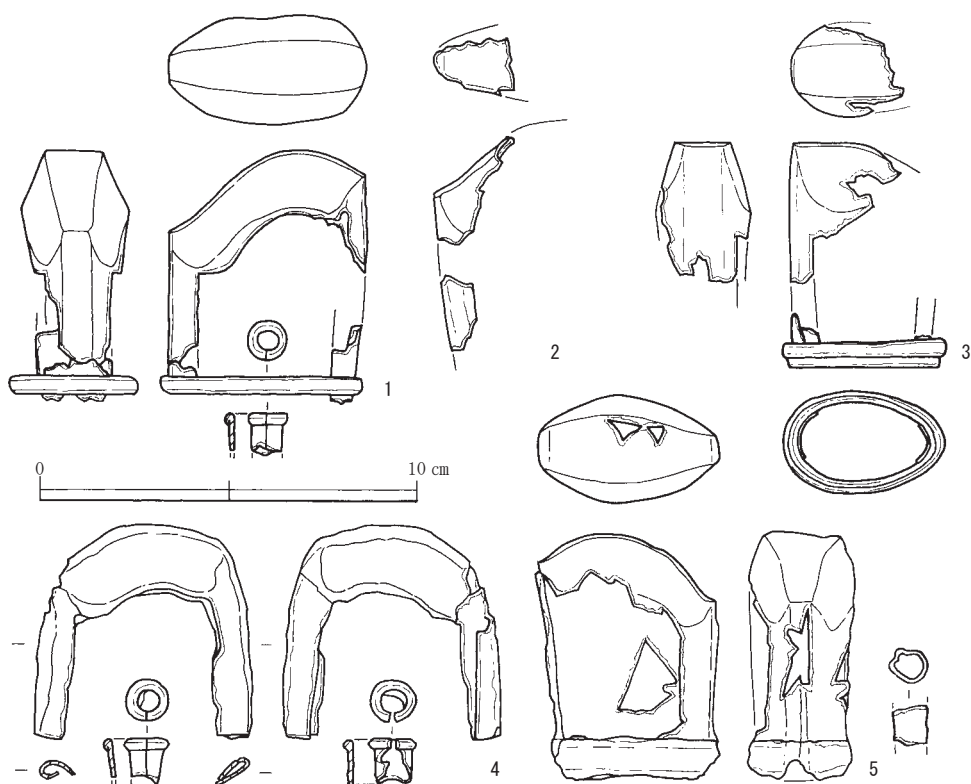


図2 B類覆輪式の諸例

に面取りはもたない。内区は金銅板で、一部がわずかに遺存し、列点文も残る。短脚式の鳩目金具2点を取り付けられている。木芯部の両面に列点文様が圧痕として残り、文様は複雑な蕨手文状を呈する。木芯部は把間の一部まで残る。

把頭のほかに把間金具、無窓板鏝、鏝縁金具、鞘尻金具が残存し、把間金具と鞘尻金具につ



1. 茨城・中台21号 2. 岡山・龍王塚 3. 新潟・西俣2号 4. 岡山・琴海1号 5. 茨城・善光寺3号

図3 C類覆輪式の諸例

いては後述する。

佐賀県妻山4号墳例（5、渡部1994） 筆者分類の中型と考えられる。覆輪は金銅製で、両側面に平坦面をもつ。内区金銅板は片面のみ残存し、列点で幾何学文を施す。もう片面には列点文が圧痕で残る。短脚式の鳩目金具2点が装着されている。

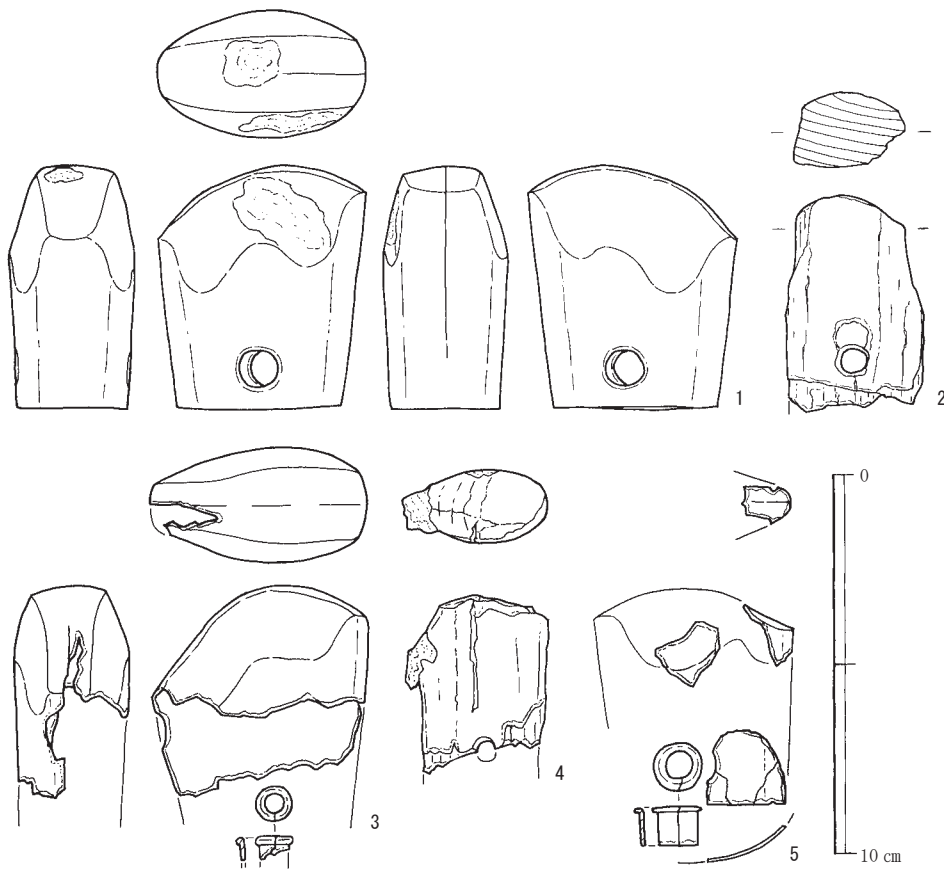
把頭とは別に、金銅製鐮と無窓板鍔を装着した鉄刀片が2点残るが、どちらが本例のものか不明である。

（2）C類覆輪式の諸例（図3）

茨城県中台21号墳例（1、新井・黒澤編1995） 筆者分類の中型に当たる。覆輪は金銅製で、刃部側のみに平坦面をもつ。内区の材質等は不明である。責金具1点が残存するが、覆輪端部がはみ出しており、2連の可能性が高い。短脚式と推定される鳩目金具が1点残存する。

把頭以外に完形の鉄本体、鐮、鞘口金具、鞘間金具、責金具、鞘尻金具が残存し、全体像がわかる。足金具などの佩用装置を伴わない。鞘尻金具については後述する。

岡山県龍王塚古墳例（2、福田1984） 金銅製覆輪の破片が2点ある。1点は頂部付近の破



1・2. 長野・中原2号 3・4. 長崎・百田頭2号 5. 新潟・谷内林

図4 C類二枚合わせ式の諸例

片で、斜面部の面取りが大きく、C類であることがわかる。もう1点は刃部側の側縁部の破片で、面取りをもたない。

新潟県西俣2号墳例（3、佐藤2009） 金銅製覆輪の破片が2点ある。1点は頂部付近の破片で、背側には平坦面をもたない。もう1点は基部付近の破片で、幅8mmの金銅製責金具をはめ、さらに幅5mmの責金具をはめる2重構造をとる。

把頭金具とは別に大刀本体が出土している。鉄製無窓板鏑と鉄製鐶を装着し、X線撮影によれば、面に半円形文、側面に渦文の銀象嵌を施す。刀身に鞘の木質は認められず、拔身で副葬された可能性が高い。

岡山県琴海1号墳例（4、岡山県教育委員会編1980） 金銅製覆輪はつぶれて扁平になっているが、中型と推定される。側面の面取りの有無は不明である。金銅製鳩目金具が2点あり、いずれも短脚式と考えられる。把頭以外に金銅製鐶と鞘口金具、鏑縁金具、責金具がある。

茨城県善光寺3号墓例（5、大森1992） 把頭は金銅製である。全体が錆に覆われ、現状で

は内面を観察できないが、覆輪式と推定する。筆者分類の中型に当たる。刃部側の側面に平坦面をもつ。下端に1条の責金具をはめる。金銅製鳩目金具の破片が1点あるが、長さは不明である。

(3) C類二枚合わせ式の諸例(図4)

長野県中原2号墳例(1・2、島田編1996) 把頭(1)は金銅製で、筆者分類の中型に当たる。頂部から背側にかけて蟬付けの接合線が認められる。両側面に平坦面はもたない。圭頭形の木芯部が残存する。木芯部(2)も鳩目穴をもつが、頂部側にずれた位置に鳩目金具の圧痕が認められる。木芯部が乾燥して縮んだ際に、圧痕が付いた可能性がある。ほかに金銅製切羽金具、切羽縁金具、鏝縁金具、六窓縁厚鏝があり、同一個体と考えられる。

長崎県百田頭2号墳例(3・4、山口編2003) 把頭(3)は金銅装で頂部付近の破片である。頂部と刃部側の側面に接合線が認められる。両側面とも平坦面をもたない。金銅製鳩目金具の破片が1点ある。木芯部(4)も残存し、頂部から刃部側に苧麻らしき繊維が付着する。

把頭のほかに金銅製切羽縁金具、責金具、鏝のついた関部付近の破片があり、同一個体と考えられる。

新潟県谷内林古墳例(5、宮腰・山本編1978) 金銅製把頭金具の小片が多数あり、そのうち3点と鳩目金具1点を図示した。把頭金具の1点は、頂部付近の破片で、2枚合わせの接合線がわずかに見える。側面に平坦面をもたない。もう1点は斜面部の破片と考えられる。さらに基部の破片があり、鳩目穴の一部が残存する。金銅製鳩目金具は完形品で、短脚式である。その他、金銅製責金具の破片がある。

(4) その他の装具(図5)

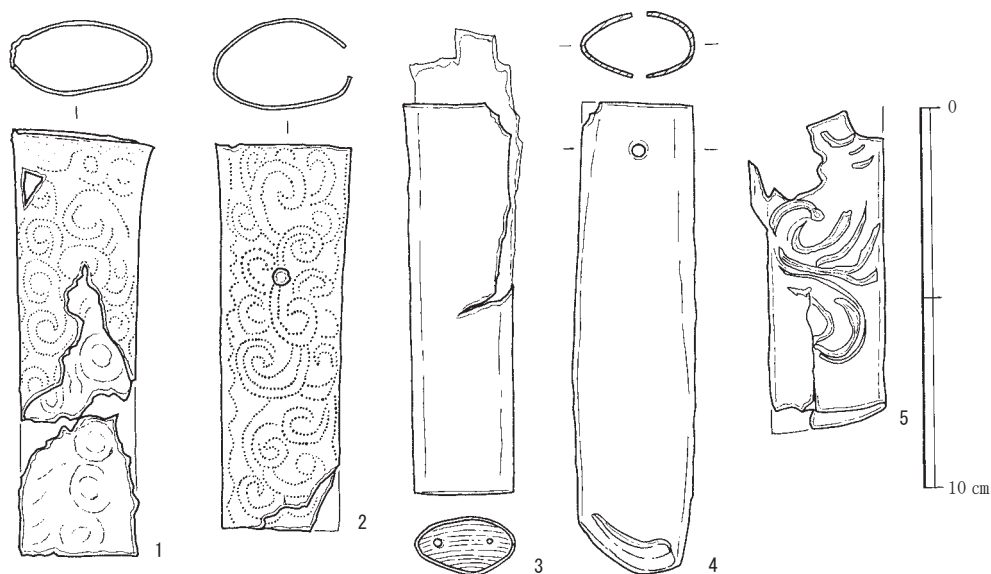
上記の把頭に伴う他の装具について、重要なものを検討する。

把間金具(1・2) 1は物井1号墳例の把間金具である。金銅製で2片に分かれており、接合しない。金銅板を筒状に丸めた接合線が背側のみに認められる。列点で蕨手文を施す。

2は千畑7号墓の把間金具である。金銅製で、筒状に丸めた接合線が刃部側のみに認められる。列点で蕨手文を施し、文様は物井1号墳例とよく似ている。

鞘尻金具(3～5) 3は千畑7号墓の鞘尻金具である。金銅製で刀身の切先付近が残存する。金銅板を筒状に丸めた接合線が背側のみに認められる。先端は筒抜けで鞘の木質がみえ、蟹目釘を打ち込んだ痕跡が残る。

4は中台21号墳の鞘尻金具である。全体を2枚あわせに作る。形態は圭頭状を呈し、先端付近に陰刻を施す。基部には目釘穴が貫通している。なお、鞘尻金具に陰刻を施す例として、神奈川県秦野二子塚古墳例(5、霜出編2013)があるので、参考に挙げておく。



1. 千葉・物井1号 2・3. 宮崎・千畑7号 4. 茨城・中台21号 5. 神奈川・秦野二子塚

図5 その他の装具

3. 考 察

（1）圭頭大刀の生産体制

鉄製刀装具との併用 西俣2号墳例は鉄地銀象嵌の無窓鍔を装着している。同様な類例として、福岡県竹並G121-1号墓例（C類覆輪式、竹並遺跡調査会編1979）がある。また、前稿で取り上げた島根県中村1号墳例（A類袋Ⅱ式、坂本2012）は鞘尻金具が鉄製、大阪府道田池4号墳例（C類覆輪式、繰納2020）も鉄地銀象嵌の鞘尻金具を使用している。

以上のように、把頭金具が金銅製や銅製で、他の装具が鉄製の事例は圭頭大刀に特有な現象であり、圭頭大刀の生産体制が独立していたという前稿の想定を補強する。

鞘尻金具への陰刻 中台21号墳例は鞘尻金具の先端付近に陰刻をもち、類例として秦野二子塚古墳例を挙げた。両者の文様を比較すると、二子塚古墳例は鞘尻全体に及ぶ唐草文で、中台21号墳例は細長い勾玉形である。前者から後者への変遷が想定され、圭頭大刀の生産体制がA類からC類まで継続していたという前稿の推定を補強する。

（2）圭頭大刀の分布

つぎに、本稿の資料を加えた分布図を提示し、改めて分布の傾向を指摘したい。なお、A類の分布は前稿と変わらないので省略する。



図6 圭頭大刀B類の分布

B類の分布（図6） B類では、佐賀県妻山4号墳例と宮崎県千畑7号墳例を追加した。前者は九州最西端、後者は最南端の事例で、九州地方における圭頭大刀の分布域が拡大した。

いっぽう、東日本では神奈川県間際根横穴墓例と千葉県物井1号墳例を追加した。前者は圭頭大刀が神奈川県の内陸部に多く分布する傾向を補強する資料である。

C類の分布（図7） C類では、長崎県百田頭2号墳例を加えた。壱岐島では双六古墳の2例（A類袋Ⅱ式、B類覆輪式、田中編 2006）があり、圭頭大刀が継続的に分布することが判明した。

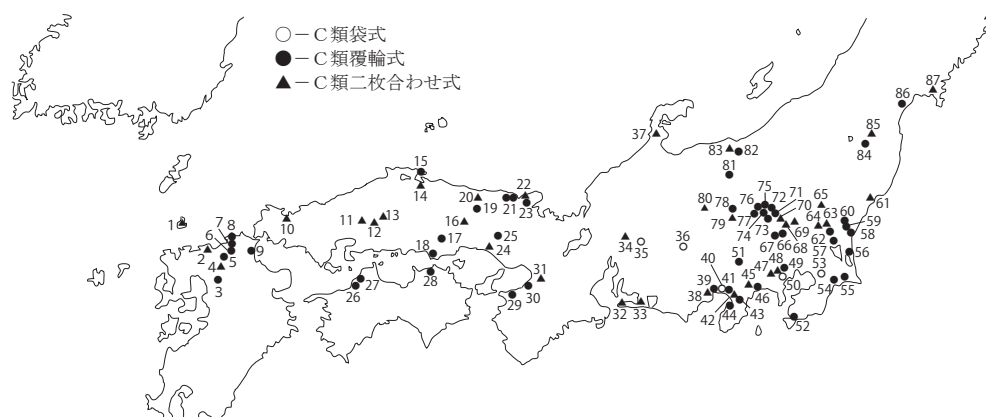
また、岡山県龍王塚古墳例と琴海1号墳例を加えた。前稿では、C類の段階で瀬戸内海沿岸に分布が拡大することを指摘したが、それを補強することとなった。

さらに、新潟県西俣2号墳例と谷内林古墳例を追加した。北陸地方では石川県高畠経塚古墳例（C類二枚合わせ式、谷内尾 1982）が孤立した存在であったが、両者の追加により、長野県北部から上越地方を経て、石川県まで圭頭大刀が流通する可能性が高まった。

その他、茨城県中台21号墳例、善光寺3号墓例は茨城県で圭頭大刀が多く分布する傾向を補強する資料である。

おわりに

本稿では、前稿で扱わなかった圭頭大刀12例について、資料調査の結果を報告した。圭頭大刀の生産と流通について、前稿から大きな論旨の変更はないが、類例の追加によって補強で



1. 百頭頭2号 2. 元岡G1号 3. 童男山12号 4. 神山 5. 巡り尾II6号 6. 竹原 7. 大穂町原新3号
 8. 久戸19号 9. 竹並G121-1号 10. 糠塚 11. 奥今田2号 12. 荒神 13. 箱山1号 14. 中山
 15. 福浦法田峠 16. 外波澄 17. 龍王塚 18. 琴海1号 19. 黒本谷 20. 広岡48号 21. 二見谷
 22. 大泊3号 23. 峰山桃谷 24. 京見山 25. 山王2号 26. 塩塚 27. 塚本1号 28. 下川津
 29. 園部円山 30. 道田池4号 31. 伝森田山 32. 藤原2号 33. 牟呂王塚 34. 椿洞2号 35. 稻荷塚1号
 36. 上溝天神塚 37. 高島経塚 38. 神明山4号 39. 室ヶ谷3号 40. 花川戸4号 41. 中里大久保K95号
 42. 船津 43. 夏梅木 44. 井田松江18号 45. かなんざわ1号 46. 諏訪脇5号 47. 登尾山
 48. 西谷戸5号 49. 稻荷塚 50. 東方1号 51. 平林2号 52. 翁作 53. 御山SX015 54. 経僧塚
 55. 関向 56. 梶山 57. 筭崎 58. 磯前 59. 笠谷18号 60. 善光寺3号 61. 北茨城二ツ島 62. 中台21号
 63. 山王塚 64. 寺山B10号 65. 大日下 66. 飯玉 67. 広木大町5号 68. ニッ山1号 69. 伊勢山
 70. 前橋八王子 71. 大日塚 72. 鑑塚 73. 高崎佐野町 74. 少林山台4号 75. 長久保15号
 76. 奥原15号 77. 伝原市 78. 久保畑 79. 中原2号 80. 南方 81. 本郷大塚 82. 西俣2号
 83. 谷内林 84. 久保 85. 浜井場 86. 大年寺山10号 87. 五松山

図7 圭頭大刀C類の分布

きる論点を考察した。また、圭頭大刀B類とC類について、新たな分布図を提示した。

筆者は現在、円頭大刀の資料調査を継続中である。その成果を公表するとともに、装飾付大刀全体から国家形成を論じることを今後の目標としたい。

本稿を福永伸哉先生に献呈し、先生のご健康と益々のご活躍を祈念する。

参考文献

- 新井 聡・黒澤秀雄（編） 1995『（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡（中巻）』茨城県教育財団、茨城
- 大森信英 1992『善光寺横穴群発掘調査報告書』金砂郷村教育委員会・善光寺横穴群発掘調査会、茨城
- 岡山県教育委員会（編） 1980『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県教育委員会、岡山
- 菊地芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会、大阪
- 繰納民之 2020「大阪府和泉市道田池古墳群出土資料調査報告」『同志社大学歴史資料館館報』第22号 同志社大学歴史資料館、京都：pp. 83-128

- 坂本豊治 2012『中村1号墳』出雲市教育委員会、島根
- 佐藤 慎 2009『田中前2遺跡 西俣古墳群2号墳』妙高市教育委員会、新潟
- 島田恵子(編) 1996『幸神古墳群』臼田町教育委員会、長野
- 霜出俊浩(編) 2013『秦野の遺跡5 神奈川県指定史跡二子塚古墳』秦野市教育委員会、神奈川
- 竹並遺跡調査会(編) 1979『竹並遺跡』東出版寧楽社、福岡
- 田中聡一(編) 2006『双六古墳』壱岐市教育委員会、長崎
- 豊島直博 2013「環付足金具をもつ鉄刀の編年」『考古学研究』第60巻第3号 考古学研究会、岡山：
pp. 77-96
- 豊島直博 2019「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第102巻第1号 日本考古学会、東京：
pp. 77-121
- 豊島直博 2023「圭頭大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第105巻第2号 日本考古学会、東京：
pp. 1-48
- 浜田晋介・長谷川祐紀(編) 1995『川崎市市民ミュージアム収蔵品目録』考古資料 第1集 関道
孝コレクション 川崎市市民ミュージアム、神奈川
- 福田正継 1984『龍王塚古墳』岡山県文化財保護協会、岡山
- 蓑方政幾 1993「千畑横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2 宮崎県、宮崎：pp. 313-318
- 宮腰公健・山本 肇(編) 1978『谷内林古墳群発掘調査報告書』新井市教育委員会、新潟
- 物井古墳発掘調査会(編) 1982『物井一号墳発掘調査報告書』四街道市教育委員会、千葉
- 谷内尾晋司 1982「古墳文化」鹿島町史編纂専門委員会『鹿島町史』資料編(続)上巻 鹿島町役場、
石川：pp. 441-510
- 山口 優(編) 2003『百田頭古墳群・山ノ神古墳群・釜蓋古墳群』芦辺町教育委員会、長崎
- 渡部俊哉 1994『妻山古墳群4号墳』白石町教育委員会、佐賀

挿図出典(筆者実測資料は所蔵機関を記載)

図1：筆者作成

図2：1・2. 川崎市市民ミュージアム 3. 四街道市教育委員会 4. 西都市教育委員会 5. 白石町教育委員会

図3：1. つくば市教育委員会 2・4. 岡山県教育委員会 3. 妙高市教育委員会 5. 常陸太田市教育委員会

図4：1・2. 佐久市教育委員会 3・4. 壱岐市教育委員会 5. 妙高市教育委員会

図5：1. 四街道市教育委員会 2・3. 西都市教育委員会 4. つくば市教育委員会 5. はだの歴史博物館

図6・7：筆者作成